【論文】

19世紀のフランス文学と結核（後編）
――「ルーゴン＝マッカール叢書」の肺癆

寺　田　光　徳

［小論の（前編）は『文学部論叢、第100号』熊本大学文学部、2009年、（中編）は「熊本大学社会文化研究８』熊本大学大学院社会文化科学研究科、2010年、に掲載］

La tuberculose dans la littérature française du XIX^{e} siècle（III^{e} partie）
La phtisie dans «les Rougon-Macquart»

Mitsunori Terada

〔Résumée〕
La tuberculose est parfois mentionnée comme maladie incurable dans la littérature du XIX^{e} siècle. On sait bien qu'il y a eu au cours du siècle un grand événement qui fait époque dans l'histoire de médecine. C'est la découverte du bacille de Koch en 1882. Est-ce qu'elle n'a pas exercé aucune influence sur la littérature ? Susan Sontag a décrit comment la maladie fonctionne comme métaphore dans la littérature dans son essai excellent intitulé *Ilnesse as metaphor*（1978）. Est-ce que nous n'avons plus rien à ajouter dans ses ètudes? Nous prenons ici les romans français du XIX^{e} siècle qui sont inséparables avec la tuberculose et essayons d'en analyser des fonctions narratologiques. Dans cette III^{e} partie nous avons pour objet «Les Rougon-Macquart»（1871-1893）.

キーワード：結核、「ルーゴン＝マッカール叢書」（ゾラ）

Ⅰ　ゾラの肺癆病理学

エミール・ゾラの20巻の小説からなる「ルーゴン＝マッカール叢書」［以下「叢書」と略記］には、肺癆に関する記述を第1巻から第20巻にわたって相当数見出すことができる。ところで驚くことに、スーザン・ソンタグのあの『隠喩としての病』は多数のヨーロッパの作家を登場させ、彼女の博捜ぶりをいやと言うほど見せつけているにもかかわらず、そこにはゾラの名前がまったく見いだせないのである。しかしそのことはソンタグにかぎらない。フランス文学にも触れながら結核の歴史を叙述する、高名な細菌学者ルネ・デュボスの名著『白い疫病』やフランスの歴史家ピエール・ギヨームの『絶望から救済へ。19世紀と20世紀の結核患者』は、たとえばゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』にかなりのページを割きながらも、ゾラの「叢書」に一言も言及していないのだ。(1) それは、実証性を本分とする結核の歴史研究という観点からすると、ゾラの「叢書」に先輩作家ゴンクール兄弟の作品をしのぐに足る価値がないと彼らが見なしたからであろうか。われわれにはそれは信じがたい

ことだ。そこで実際にゾラの作品を検討してみると、歴史家にとっての実証的な価値を云々する以前の問題として、彼の「叢書」が厄介な事実を抱えていることが判明する。ゾラは「叢書」を1869年頃から1893まで実に20年以上の歳月をかけて書き継いできたため、結核の病理学史に大転換を記す1882年のコッホの結核菌発見というような画期的な出来事を考慮せざるをえず、結果的に彼の肺癆病因に関する考え方が長い間に矛盾を来してしまったという事実である。すると、ゾラにひいきめな見方だとは言え、われわれは歴史家たちの実証的な批評眼にゾラがかなわなかった理由を次のように推測できるだろう。ゾラは自然主義作家として同時代の医学の情況にだれよりも敏感に反応しようとした作家であり、それは肺癆に関しても例外ではなかった。しかしながら医学史家たちがそのようなゾラに言及しようとしても、肺癆に関する限りまとまった考え方を提示できない。それで概論的な肺癆に関する歴史研究の中ではゾラを敬遠せざるえなかったのだろう、と。

したがってゾラに関してここで最初に取り組まねばならないのは、ゾラの「叢書」における肺癆の病理学がどのように変化していったのか、われわれ自身が歴史家の実証的な眼でもって整理を試みることである。またそうすることで、ひいては今後のゾラの肺癆に関する議論において、病理学的思考内容の異同に起因する無用の混乱を回避できるようになるだろう。

遺伝病としての肺癆　肺癆病理学の上でコッホの結核菌発見が持つもっとも重大な意義というのは、それまで遺伝病と見なされていた肺癆が、実際は結核菌という病原菌によって引き起こされる疾病だと確認されたことである。それは肺癆の病因論の分野で革命的な転換が生じたことを意味する。

肺癆の病因に関してゾラは遺伝が原因であるといったいいつ頃まで考えていたのであろうか。「叢書」の中で肺癆を遺伝のせいだとする見解が最後に語られているのは第14巻『作品』（1886）においてである。この小説の主人公である画家クロードが友人の小説家サンドーズと連れだって、かつては建築家志望だった旧友のデュビューシュのところを訪れる。今では肺癆に悩む一家の世話に没頭する旧友デュビューシュの悲愴な姿を目の当たりにして、サンドーズが肺癆の遺伝病説を表明しながら状況説明を試みている。

> マルガイヤンの奥方［デュビューシュの義母］だが、彼女は蒼白い顔をし、ナイフの刃のように細くなって、肺癆で死んだ。それにこれは遺伝病（mal héréditaire）で、変性症（dégénérescence）だった。それというのも彼女の娘のレジーヌ［デュビューシュの妻］自身、結婚以来咳がずっと止まらないからだ。今、彼女はモン＝ドール［オーヴェルニュ地方の有名な湯治場で、バルザックの『あら皮』にも出てくる］で温泉治療をしているけど、そこに子供たちを一緒に連れて行く勇気が出なかったんだ。子供たちが去年の湯治ではあまりにも厳しい大気にひ弱な体では耐えられず、すっかり体をこわしてしまったから。(2)

デュビューシュが結婚した相手は肺癆で死去した母親を持つレジーヌで、その妻自身が肺癆を患っているばかりか、さらにまた彼女とのあいだにできた二人の子供ガストンとアリスも瘰癧（scrofule）と肺癆に苦しんでいたのである。(3)

サンドーズのせりふに現れた肺癆の遺伝病説をそのまま作家ゾラの見解と見なすことはできないかもしれない。また『作品』の時代考証を考慮に入れなければならない。この場面は最後から２番目の

章に当たる第11章に挿入されているので、その時代背景はゾラの「準備書類」では1870年、その後の執筆時に行われた変更から推測すると1875年頃になると想定される。(4)『作品』が1885年から1886年にかけて執筆されたとして、その時点でゾラが1882年のコッホによる結核菌発見を承知していたとしても、時代設定からしてとても肺癆の細菌病因論は説けまい。しかしながら『作品』の執筆時期までゾラが細菌病因説に与した直接の証拠は見いだせないから、たとえサンドーズという架空の人物を通してのことだとは言え、彼のせりふは少なくともゾラが肺癆を遺伝病と見なしていたことの消極的な証明にはなるだろう。

ゾラが「叢書」のなかで、肺癆は遺伝疾患にあらずという見解を初めて明確に述べるのは、最終巻の『パスカル博士』（1893）においてである。そこでは作品の主人公で医者のパスカル博士がつぎのように語る。

> 「ねえ、私はちょうどギロードさんの家へ行くところなんです。この女性のことはご存じでしょう。鞣し皮職人だった夫は５年前に肺癆でなくなりました。二人の子供がいました。ソフィーはもうすぐ16歳になる娘で、運良く、父の死の４年前に、近くの田舎に住むおばのところへ送ることができました。息子のヴァランタンは21歳になったばかりで、母親には恐ろしい結果になるからと強くたしなめたんですが、それでもその子を溺愛しているせいで、そばに置きたがっています。もちろん、肺癆が遺伝ではないというわたしの主張の正しさはおわかりでしょう。ただし肺癆の親は変性した体質（terrain dégénéré）を子供に残すので、ちょっと感染（contagion）するだけで病気は進行してしまいます。今になってみればヴァランタンは父と日常的に接触して暮らしてきたために肺癆に苦しんでますが、逆にソフィーの方は太陽を一杯に浴びて育ち、素晴らしく健康なんです。」(5)

現代の確立された結核病理学では、結核の病原体は結核菌である。しかし結核菌は少量の感染であれば結核を発病させることなく、逆に感染者は知らないうちに結核に対する免疫力を獲得して、それ以降は感染を恐れる必要がなくなる。結核感染の診断法としてよく知られているツベルクリン反応は結核感染の有無と同時に免疫力が備わっているかどうかを判断できるので、結果が陰性の場合はＢＣＧ接種をして人為的に免疫能力を付けられる。ところでゾラの活躍した19世紀最後の四半世紀における医療の状況を見てみると、結核菌の発見はもとより、抗原抗体反応を軸とした免疫メカニズムの解明はベーリングと北里の抗毒素、メチニコフのマクロファージによって1890年代からやっと緒につき始めたばかりであった。治療法に関わるツベルクリン反応は1907年、ＢＣＧ接種にいたっては1921年になってやっとその効果が確認されるのだから、パスカルの念頭にあった肺癆の病理学がもちろん現代ものとはかけ離れていたことは言うまでもない。

さて、上記の引用に表されたパスカルの病理学的考察は、①肺癆は遺伝疾患ではないが、②肺癆に罹りやすい体質かどうかは遺伝に左右され、そして③肺癆は外因性の、感染を介する病原体が原因である、と簡単にまとめられる。『パスカル博士』の物語内容は、「準備書類」(6)や「ルーゴン＝マッカール家の家系樹」［以下「家系樹」と略記］のパスカル博士の生没年によると、1872～73年に時期設定がなされている。虚構上ではコッホの結核菌よりも10年前に遡る時代のことが叙述されているのだ。その結果として、作者のゾラは、『パスカル博士』を執筆する際には肺癆の細菌説を意識していながら、

それでも作品の時代的制約からそのことを表現できないでいる、というまことに微妙な立場に立たされていることになる。こうした情況については、肺癆の病因についてもっと深入りして述べた別の個所から推論することができる。

> それに彼［パスカル］は肺癆に関する研究で、肺癆が遺伝病でないこと、ただ肺癆を患うどの子供も肺癆を例外的に進行させやすい変性した体質を生まれつき持っているだけだと結論づけていたので、もはや彼は遺伝によって弱体化した体質を強化して、寄生体（parasites）というか、むしろ破壊の酵母（ferments destructeurs）に対する抵抗力を付けさせることしか考えなかった。その破壊の酵母について、彼は細菌理論（théorie des microbes）よりもずっと前からそれが人体に潜んでいるのではないかと疑っていたのだった。（『パスカル博士』、p.948［邦訳p.39］）

医学史から見ると、ここで使用されている「細菌」ということばがまた時期的にかなり微妙な問題を含んでいる。なぜなら「細菌」（microbe）がフランスで使用され始めるのは1879年のことであり、(7) 小説の語り手は、時代考証からすると、勇み足をしたと断ぜざるをえない。ところで、ここまでわれわれは肺癆の細菌説に訴える際、もっぱらコッホが結核菌を発見した1882年を援用してきたのだが、フランスの医学者Ｊ・Ａ・ヴィルマンは1865年にすでに実験によって肺癆の伝染性を確証するとともに、体質や遺伝による病因論に反論している。この時病原体は「病毒」（virus）と名付けられていたにしても、概念的には細菌理論に近い病因論が提起され始めていた、という新たな事情も存在していたのである。(8) したがって、細菌ということばを別にすれば、パスカルが最新の医学研究の動向に通じた医者という設定であれば、細菌に近い病原体のことを「ずっと前から」意識していたと言っても何ら問題はないのかもしれない。

肺癆の病原体　肺癆の病原体をどう呼ぶかという問題は、実はその病原体をどのように定義づけるかという問題に依存している。それに肺癆を遺伝病と定義する際に、生殖を介して親から子に遺伝される何らかの因子があり、それが親と同様子に肺癆を発病させるのだと考えても何ら不思議ではない。すると肺癆が遺伝病であるか否かは、ひとえに病原体がそのような遺伝によって伝達される内在的な因子なのか、それとも人体とは独立して存在する外的な因子なのかにかかっている――その上当時は先天性疾患と遺伝性疾患のあいだで概念的な区別がなされず、両者ひっくるめて遺伝病と見なされていたことも念頭に置いておかなければならない。ゾラが肺癆の遺伝説を転換させたのはいつかという問題は、実はその時肺癆の病原体がどう定義されていたのか、はたしてその病原体が細菌説にふさわしい外的なものだったのかということを確認することでもあろう。

ゾラは1874年発行の「叢書」第４巻『プラッサンの征服』［以下『征服』と略記］で、パスカル博士の７歳下の妹である狂信家のマルト・ムーレの臨終に際して、ルーゴン家の主治医ポルキエに次のようなせりふを言わせている。

> 〔……〕ムーレ奥様［マルト・ムーレ］はきっとお若いときから咳をしておいでになったのではありませんか。わたしはあの方が何年ものあいだ病原体（germes du mal）を宿していたと思います。最近、それも特に３年前からでしょうが、肺癆は体内で恐ろしく進行していきました。〔……〕(9)

ここで用語として使用されている《germe du mal》であるが、現在なら「病原菌」という明快な訳語を当てられても、「細菌」理論が確立されていないこの時代では、やはり一般的な「病原体」とかあるいは生硬な「病原種細胞」という訳語を当てざるをえまい。この病原体は患者にとってはたして内在的か、それとも外在的なのか。

この場面は小説の最終章23章に出てくる。『征服』は1858年から1864年の出来事を想定している、とH・ミットランが推定している。[10] ゾラが時代考証をきちんとしていることを前提にするなら、1865年のヴィルマンのきわめて先駆的な肺癆伝染病説にも先行して、1864年頃にプラッサンの名士たちを顧客に持つポルキエ医師までもがすでに外因性の「病原体」に肺癆の病因を見いだしていたとはまったく信じがたいことである。したがって《germe du mal》を遺伝疾患としての肺癆を媒介する内在的因子と取る方が妥当であろう。

上記の推論は状況証拠に依拠しているにすぎない。だが、「病原体」（germe）を内因性のものだとする考え方が、ゾラの有力なアスクレピオスの一人である遺伝学者モロー・ド・トゥール（1804－1884）によってなされている。彼は『歴史哲学との関係から見た病的心理あるいは知的活動力に及ぼす神経障害の影響について』［通称『病的心理』］（1859）の中で、「病原体」を遺伝疾患の根元的要素としてこんな風に提示しているのである。

> 自然はその産物の中で自らを模倣し、自らを繰り返し、自らを複製している、それ故に遺伝は模倣の法則と呼ばれてきた。したがって、病原体（germe maladif）を託された器官や器官系は、形成原理そのものから紛れもない異常状態にあると見なさなければならない。[11]

これで当時は《germe》が遺伝病説と親和的関係にあったと証明可能である。したがって《germe》の使用は、ゾラが肺癆に関して遺伝病説を放棄し、伝染病説を採用したことの証拠にはなりえない。

「叢書」の中には、その他に、肺癆の病因を現に指し示しているか、あるいは機会さえあればそうする可能性がありそうな単語が存在する。まずパスカル博士に関する引用文中で《parasite》、《ferment》にはすでに出くわしているが、それに加えて、ゾラは先のヴィルマンが肺癆の病因に持ち出した《virus》という語も使用している。この点について『19世紀ラルース大辞典』［以下『19世紀ラルース』と略記］の定義に依拠しながら、どれが肺癆の病原体を表す表現としてもっとも適切かを考えてみると、それが引き起こす病気との関係で感染性の原理をはっきり打ち出しているのは《parasite》と《virus》の二つである。そのうち前者が引き起こす病気はたとえばゾラ自身が例示しているように「輪癬（teigne）や疥癬（gale）」[12] などの皮膚病と親和性があるに対して、後者の方は『19世紀ラルース』中で天然痘、コレラ、チフス、赤痢、梅毒など、その後細菌やウイルスが病因だと確認されるにいたる主だった感染症と関係づけられている。結局、ゾラの時代に許される肺癆の病因を指し示す用語として《virus》がもっとも適切なものとして浮上してくる。しかし残念ながらそのような使用例はゾラの「叢書」中には存在しない。しかも厄介なことに、われわれの期待に水を浴びせるように、「遺伝の病原体（virus héréditaire）を泡のようにはきだしている獣」という使用例すら、叢書も終わりに近づく第18巻の『金』（1891）の最終章中に見いだされる始末である。[13] この発言の主はカロリーヌ夫人なので、彼女がゾラの肺癆に関する病理学的思考に責任を持つ必要はない。だがそれにしても、まったく反対に内在性を意味する彼女の発言内容をもって、ゾラが《virus》を

外因性と捉えていたという証拠にできないことは明白である。結局ゾラの《virus》の使用もまた、《germe》の時と同じく、ゾラの肺癆伝染病説転換のための証明にはならない。

これまでの検討結果から、いつからゾラは肺癆の病原体を外因性のものであると考え始めたか、そしてその結果としていつから肺癆が遺伝病だという考えを放棄したのかという問題に対して一応の決着を付けておこう。「叢書」が第二帝政期の1852年から1870年という時代枠を設定しているため、ゾラが実際に作品執筆をした1869年頃から1893年の期間とは20年あまりの差が生じている。そのため、うっかり虚構上の年代を頼りにしていると思わぬ過ちを犯しかねない。そこで「叢書」の虚構上の年代設定を棚上げにして考えてみると、彼の考えの転換を明白な形で表しているのは結局『パスカル博士』しかない。ここまで挙がった反証をすべてそのまま取り上げ、「叢書」中で最後のカロリーヌ夫人の《virus》遺伝説をそのまま採用すると、もっとも遅い時期としては、『金』を書き終わった1891年から『パスカル博士』を書き始めた1893年の間が転換の時期として想定されるだろう――後出の注(32)も参照。だが繰り返し言っておくと、ゾラがカロリーヌ夫人を古くからの遺伝説にとらわれている人物だと設定しても何ら差し支えはない。残念ながらゾラの遺伝病説放棄の時期を判断する資料は今のところこれ以上手元にないのだが、彼が1891年よりももっと早い時期に遡って肺癆の感染病説に与していたという可能性が完全に消えたわけではなかろう。

ところで、これは医学史的な観点からすれば価値のない問いなのだが、ゾラの医学思想をもっとも忠実に代弁するパスカル博士について、彼が虚構上の人物であるにせよ肺癆の遺伝病説をいつ頃撤回したとゾラが想定したがっていたのかを問うことができる。それについてY・マリナスが1863年まで遡らせることができると推論をしている。[14] マリナスの推論は、『パスカル博士』が1872～73年に時代設定されており、パスカル博士はプラサンに引きこもって肺癆を含む遺伝の研究を「20年以上も前から」(『パスカル博士』p.944［邦訳p.35］)行ってきているという記述に依拠しているようだ。パスカルの肺癆感染病説採用について最も早い時期を考えるとマリナスのような想定も成り立つようにも思えるが、ただしいくら何でも1865年のヴィルマンによるきわめて先駆的な肺癆伝染病説を、当のヴィルマン自身も含めた専門家の医者たちに先駆けて、パスカルが1863年にすでにいち早く採用したというのは想像しがたいことではある。

肺癆体質の遺伝　肺癆が遺伝病であるか否か、病因は内因性か外因性かというこれまでの議論のほかに、先のパスカル博士の引用でまとめた論点の中には、②遺伝によって肺癆に罹りやすい体質を受け継いでいるという肺癆体質の問題があった。ところで医学史の観点からすると、この肺癆体質の問題がまた古くからの側面と新しく脚光を浴びる側面を抱えていたようである。

ゾラの「叢書」中でここまでに見てきた肺癆の症例では、『作品』のデュビューシュ家、『パスカル博士』のギロー家の2例はともに家族病として提示されていた。ちなみに文学史の上から見ると、この点は「結核が病める自我の病気」(スーザン・ソンタグ)[15] とする肺癆のロマン主義的見方に対して、ゾラの特徴をなすものであろう。それはともかく、肺癆について、病因が遺伝によるにせよ感染によるにせよ、家族病としての特徴はだれの眼にも歴然としていた。それにこの特徴に依拠するなら、当時の一般人にとっては、肺癆が眼に見えない微細な細菌を通じて伝染すると考えるよりも、遺伝によって親から子へと受け継がれたと考える方がよほど説得性があっただろう。なぜならそのような細菌説を唱える細菌学そのものがまだ緒に付いたばかりで、専門家の医者のあいだにすら普及するには

まだまだこの先相当な時間を必要とするような状況だったからである。

このような時代状況の中で、パスカル博士は遺伝が直接肺癆を伝達するという従来の見解を、体質を介して間接的に影響を与えるという新たな見解に変えた。そこで古くからの側面というのは、肺癆の家族病という特徴が体質を通してであれ遺伝という考え方を介するのでなければ理解できないというところに現れている。また新しい側面というのは、家族病としての肺癆が体質の遺伝に依存すると仮定すれば、その感染のばらつきが理解可能になるという点である。ギロー家の感染情況を見ると、同じ家族として暮らしながら、ギロードは夫ギローの肺癆に感染せず、また子供たちのなかで娘の方は肺癆を克服して結婚までこぎ着けたのに対して、息子の方はついに肺癆で父親と同じ運命を余儀なくされた（『パスカル博士』pp.1081-1082［邦訳p.211］）。こうした家庭内での感染のばらついた情況をどのように解釈するべきか。ギロードが夫の肺癆に感染しないのは罹りにくい体質を遺伝によって受け継いだからだ。また肺癆に感染した二人の子供は父親から肺癆体質を受け継いだと考えられる。それでも、娘ソフィーの場合のように、元々の虚弱さに配慮して肺癆の病原体がはびこる環境から遠ざけ、体力を増強させるため転地療法のような適切な対処の仕方をした場合には、病気を克服できることがある。ところが息子ヴァランタンのようにそうした配慮を欠いた場合、不幸な結果にいたるしかない。肺癆の家族病という性質と感染のばらつき具合という事実を前にして、パスカルの示した体質遺伝という見解はこのように解釈の合理性と妥当性を確保させていたのである。

結核の診断・治療は現代では免疫機構の機能に依拠したツベルクリン反応――ＢＣＧ接種という一連の手続きによって行われている。免疫機構がまったく想定されていない時代にパスカル博士の提示した肺癆体質というのは、実は肺癆に対する親和性の有無を左右している点で免疫機構と同じ機能を果たしていることになる。肺癆を受けつけにくい体質というのは肺癆に抗する免疫が確立された人体と同じ状態を指すからだ。したがって肺癆感染における体質遺伝という問題は、一方で肺癆の病理学に過去の遺物のように残る遺伝説の名残として否定的な評価を与えられる一方で、免疫という生体の防御機構を機能的に先取りしたものとして一定の評価を与えることもできるのである。(16)

Ⅱ　ルーゴン＝マッカール家の肺癆

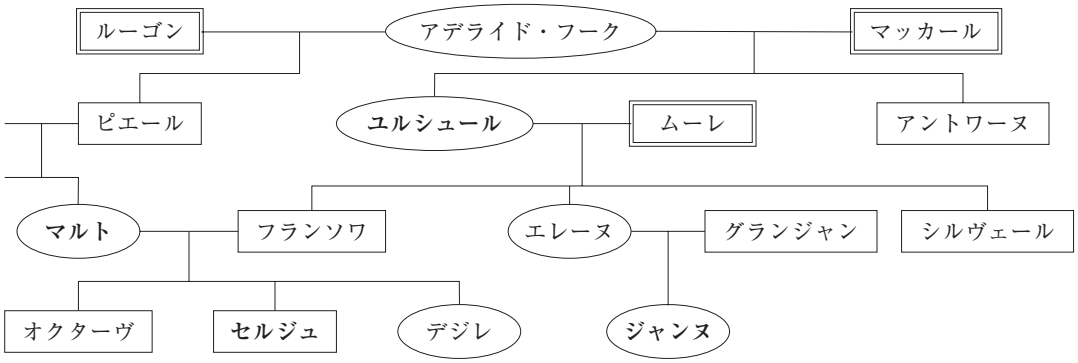
スーザン・ソンタグの卓抜なエッセイ『隠喩としての病』は、たとえば「結核は人を性欲過剰にし、異常なまでの性的魅力を付与する」（p.13［邦訳p.18］）、「結核は生をせき立て、際立たせ、霊化する」（pp.14-15［邦訳p.20］）、「結核とは病める自我の病気である」というような、結核に関する数々の名言を含んでいることでよく知られている。その中でも文学における結核をもっとも際立せ、包括的に表現するのは「結核はロマン主義的な世界観につかえるものであった」（p.70［邦訳p.104］）という一文であろう。ところでこうしたソンタグがゾラの作品に一言も言及しなかったのは、ゾラの結核には彼女の結核観と相容れない、対立するものがあり、結局そこに評価に値するようなものを見いだしがたいと彼女が判断していたからであろうか。ソンタグ自身も認めるように、19世紀後半になると結核に関する表現からはロマンティックな病気崇拝の側面が影を潜め、それとは反対に病気に対する写実的な見方が色濃くなってくる。ゾラの自然主義文学というのはそうした病気の実証的な観点を前面に掲げた文学の謂であろう。したがってゾラの「叢書」の肺癆には、ロマン主義的な結核観とは別の形で機能し、まさしく自然主義的な結核観と名付けるにふさわしいような、新たな肺癆の利用のされ

方が見いだされるのではないかと想像してもおかしくない。

そこで次にわれわれは、ソンタグの明らかにしたロマン主義的結核観を念頭に置きながらも、ゾラの「叢書」の肺癆が今までの文学作品にないどのような特徴を持っているか、とりわけ小説の説話論的な側面に焦点を当てて検討を試みたい。

家族病としての肺癆　第1章で見てきた肺癆の症例というのは、デュビューシュ一家やギロー一家といういずれもルーゴン＝マッカール家には属さない患者たちに関するものであった。「叢書」の根幹を構成しているルーゴン＝マッカール家の中にも、肺癆の症例が見られる。しかもその患者たちはすべてムーレ家に属し、すでに述べてきた肺癆の家族病という特徴を如実に示している。そこでまずルーゴン＝マッカール家にはどのような肺癆患者たちがいたのか、系図の形式で示そう。

【ムーレ家の系図】［肺癆患者はボールド体で表示］



「叢書」で最初に肺癆患者として言及されているのは、第1巻『ルーゴン家の繁栄』［以下『繁栄』と略記］に登場するユルシュール・マッカール（後に結婚してムーレを名乗る）である。彼女は、ルーゴン＝マッカール家の始祖アデライド・フーク（ディードおば）を母に彼女の愛人マッカールを父に持つ、ルーゴン＝マッカール家の第二世代で、異父兄のピエール・ルーゴンがルーゴン家、実の兄アントワーヌがマッカール家を相続するのと並んで、叢書中ではムーレ家に嫁ぐことによって第三の家系の起源となる人物のひとりである。ムーレ家の名は叢書名から省かれているとは言え、20巻からなる叢書では小説の主人公となる人物を輩出するので、ルーゴン、マッカールの二家系と同様、重要な三本の幹のひとつを「ルーゴン＝マッカール家の家系樹」中で構成している。

> ユルシュールは1839年に死んだ、それで兄の不吉な予言を現実のものにしてしまった。母親の神経症（névrose）が彼女にあってはゆっくり進行する肺癆に変わり、それが彼女を徐々にむしばんでいったのである。彼女は3人の子供を残した。18歳になる娘はエレーヌといい、勤め人のところに嫁いでおり、二人の息子のうち長男のフランソワは23歳、末っ子はかわいそうにわずかに6歳で、名前をシルヴェールといった。(17)

この引用にある「母親の神経症が彼女にあっては……肺癆に代わり」という文は、現代では常識的に受け入れがたい。ゾラは同様にわれわれにはにわかに信じがたいような遺伝の症例をこのほかにも別の登場人物のところで展開している。たとえばルーゴン＝マッカール一族の第四世代に属し、ユルシュールの孫に当たるセルジュ・ムーレの場合、「家系樹」[18]には、「遺伝によって神経症は宗教的偏執（manie religieuse）［78年版］／神秘主義mysticisme［93年版］に変化」、同じくその妹デジレ・ムーレの場合は「遺伝によって神経症は痴愚（imbécilité）に変化」と記される。それでも、この時期の代表的な疾病分類学を紹介している当時の病理学の権威グリゾルによれば、「偏執」や「痴愚」はともに「知的障害」として大項目の「神経症」に属するので、[19]今の二人の場合は神経症の現象形態における個人差と解されて、当時は専門家の間ですらあまり問題にされなかったのではないかと推測されるかもしれない。

しかし、マッカール家の『居酒屋』の主人公ジェルヴェーズの子供たちのことになると話は別だろう。「家系樹」で、長男のクロードは「神経症が天才に変化」、二男ジャック［93年版］（および三男エチエンヌ［78年版］）は「アルコール中毒が殺人狂（folie homicide）に変化」、また彼らと異父兄妹にあたるナナは「酩酊癖がヒステリーに変化」［78年版］、「アルコール中毒が身体および精神の上で性倒錯症（perversion）に変化」［93年版］とそれぞれ記される。先のグリゾルによれば「アルコール中毒」は特に「中毒」疾患なので、アルコール中毒が当時いくら遺伝する可能性があると考えられていたとしても、それが別の疾病カテゴリーである「神経症」中の「狂気」、「性倒錯」に変化するというところまでいくとなると、われわれはどうしても荒唐無稽だと考えざるをえまい。

「変性症」遺伝　ところがゾラの時代には、彼が示したような一見非科学的な飛躍を保証する遺伝理論が実際に存在していた。ゾラが叢書のために参考に供したと言われる遺伝理論でしばしば取り上げられるのはP・リュカ（1808－1885）の『神経系の健康および病気状態における自然的遺伝に関する哲学・生理学概論』［通称『遺伝に関する哲学・生理学概論』、以下『遺伝概論』と略記］（1847）であり、ゾラ自らが「叢書」に利用するためにその内容をまとめた大量のノートを残しているうえに、「家系樹」にはリュカの遺伝類型を直接利用していることから、その歴然たる影響がかねてから言われてきた。しかしアルコール中毒や肺癆などに関する遺伝の病理が「叢書」の説話法を担っているという観点からするなら、ゾラのノートに示されたリュカの遺伝理論が「叢書」に与えた顕著な影響は、これまで強調されてきた遺伝類型だけにとどまらない。遺伝とは何よりも病気の遺伝として現出すると考えられていたこと、それから「身体的遺伝は神経系を介して伝達される（神経支配）」[20]という言明や、なによりも「神経病（maladies nerveuses）は遺伝によって親から子に伝わるとともに患部や性質を変化させる。性病が突然停止し神経病に変わる」[21]という指摘は、もっと強調されてしかるべきであろう。

もちろん今日ではそのような遺伝理論は科学的根拠を欠いているとだれもが認める。しかしながら小説の文学的な価値は何もこの種の科学的真理にしたがって判断しなければならないと言うわけでもない。また物語の説話法は科学的論理ではなく、神話的論理にしたがって展開されることは言うまでもない。ある科学的な理論が当の科学の中ではつとに失効しているとしても、それが適用された文学の中では説話的価値を依然として保持していることはよくあることだ。それがゾラの「叢書」におけるリュカの遺伝理論というわけである。そうして、このような「科学的」遺伝理論の裏付けがあった

からこそ、先に引用した「母親の神経症が彼女にあっては……肺癆に代わり」という一節のように、現代のわれわれには荒唐無稽に見える飛躍もゾラに可能になったのである。

さらにJ・ボリー、J－L・カバネスやI・ドラモットが、ゾラ作品の医療的側面を集中的に研究するなかで、[22] リュカの遺伝理論とほぼ同時代のB・モレル（1809－1885）の『人類の身体、知性、道徳の変性とその病的変種発生の原因に関する概論』［通称『変性症』］（1857）やモロー・ド・トゥールの『病的心理』（1859）もそれに劣らず重要な役割を果たしているという指摘を繰り返している。[23] 特にモレルが唱道した「変性症」（dégénérescence）という遺伝理論は、単純・明快に「叢書」の説話的方法論を指し示す指標的価値を有する。モレルが『変性症』の序論で提出している定義によると、組織や細胞の退行性病変を表す際に使われる「変性」（dégénération）と異なり、「変性症」というのは、人が内に抱えるようになった病的要素が遺伝を介して次第に変化・増幅していき、最終的には数世代経過するあいだに、遺伝性欠陥のために早世や生殖不能を引き起こして人々を滅亡に導くというものである。モレルは第一世代のアルコール中毒に始まり第四世代で白痴（idiotisme）の子孫によって絶滅する家系を変性症の実例に挙げているが、[24]「叢書」中で遺伝の悪影響を蒙った子孫がほとんどすべて第四・五世代で絶えることを想起するとき、背景となった第二帝政期中にいくつかのルーゴン＝マッカールの家系を絶やそうと意図した場合に、変性遺伝論はゾラに恰好の「科学的」根拠を提供したことは間違いなかろう。[25]

ところでこうした変性遺伝論の一環として捉えられた肺癆観ほど、たとえばソンタグが「結核は病める自我の病気である」とみなしたロマン主義的な結核観と対立するものはあるまい。ソンタグの結核観をさらにより詳しく説いて見せたジョルジュ・ギュスドルフは、病気は病人のものであるとして結核に代表される病気の個人性を強調し、病気を病人から独立させて問題にする実証主義的医学に対置させている。[26] なるほど実証主義を旨とする近代医学は、病人や医者の主観とは独立した、科学的で客観的な医学を目指していたからである。そして、ゾラの標榜する自然主義もまたこのような実証主義と実験からなる科学に由来していたことは言うまでもない。しかも「これ［マルガイヤン夫人の肺癆］は遺伝病で、変性症（dégénérescence）だった」（『作品』）というサンドーズの説明や、「肺癆の親は変性した体質（terrain dégénéré）を子供に残す」というパスカル博士の断言が語るように、ゾラにあっては肺癆は個人的な側面よりも家族的、集団的側面をより強調されていた。このようなゾラの肺癆の異なった見方は、ロマン主義的肺癆観とは別に自然主義的肺癆観という命名を与えることをわれわれに許すに十分な理由となろう。

さらにゾラの肺癆観をロマン主義的肺癆観と対置してみると、興味深い両者の傾向の相違が浮かびあがってくる。ロマン主義は個人の側面を強調するため、患者個人の心理的な解釈が優勢になる傾向を持つ。それに対して自然主義は集団的な側面、なかでも肺癆による変性的遺伝を浮き彫りにするため、社会的危機、ひいてはイデオロギー的な側面に訴える傾向を持つ。ソンタグは病気のロマン主義的な見方によって隠喩がはびこったため、病気が本来持っている現実的危険が骨抜きにされることを非難していた（『隠喩としての病』、p.3［p.6］）。ところで社会的な危機を煽りイデオロギー的な主張に走る自然主義的肺癆観にも同じように危険が予想される。それは自然主義的肺癆観がもっぱら変性的遺伝の危険を叫ぶとしたら、優性思想を普及させるのにもっとも好都合な論拠として利用されうるからである。

肺癆と蕩尽の情熱　ムーレ家にあって、ユルシュールに次いで肺癆を患うのは、ユルシュールの長男フランソワ・ムーレのところに嫁いできた、彼の従妹マルト・ルーゴンである。「叢書」第四作目に当たる1874年発行の『征服』の最終章で、肺癆を患った末に44歳で臨終を迎えるマルトの様子が描写されている。

> 「ご臨終です」と彼［ポルキエ医師］はさらに声を低くして続けた、「ずっと前からわたしはこの悲しい結末を予期しておりましたことを、今日奥様［マルトの実母ルーゴン老婦人］に打ち明けなければなりません。おかわいそうに、ムーレ奥様は肺を二つともやられており、その肺癆は神経病（maladie nerveuse）を併発しておりました。」［……］
>
> 「［……］最悪の結果は予想されていたのですが、日々の状況がそれを早めたのかも知れません……。ムーレ奥様はきっとお若いときから咳をしておいでになったのではありませんか。わたしはあの方が何年ものあいだ病原体を宿していたと思います。最近、それも特に3年前からでしょうが、肺癆は体内で恐ろしく進行していきました。それにつけても何という信仰心、何という熱情（ferveur）でしたでしょう！　わたしはあの方が聖女のようにお亡くなりになるのを目の当たりにして感動を覚えました。致し方ありません。神の思し召しは測りがたいもので、科学はたいていの場合無力ですから。」（『征服』、p.1201［邦訳pp.417-418］）

医者のポルキエが信仰心と並べて「熱情」と言った時、プラッサンではフォージャ神父を取り巻くだれもが彼に対するマルトの激しい恋情を知っているので、彼のそのことばには信仰に引っかけた皮肉を感じとったであろう。恋愛と肺癆が密接な関係にあることは、バルザックのラファエル、デュマ・フィスのマルグリットの例を引き合いに出すまでもなく、ロマン主義的肺癆神話の最たる特徴のひとつであった。恋愛と肺癆とを結びつけるのにもっとも強力に働いた一方の熱情と他方の消耗熱（fièvre hectique）は、自然主義文学になるとむしろ比重が生理学的な方向に傾くことによって、身体の喚起する異常性が感情の異常性を際立たせるように働く。マルトが終章の23章で死出の旅に発つ前から、肺癆故の病的異常は神経を介して精神や感情に大きな悪影響を及ぼしていたようである。第17章は「マルトの健康状態はポルキエ医師を不安にさせた」という文によって始まり、そこではマルトの肺癆の病状がいよいよ進行して「喀血」を呈する危機的な段階までいたったことを明らかにしている（p.1098［邦訳p.276］）。そのすぐ後で、肺癆にもかかわらず恋ゆえに魅力を増したマルトの矛盾に満ちた姿が描写される。

> 「ムーレ夫人は若返ったわね」と感嘆してド・コンダマン夫人が言うのだった。
>
> 「そうです、」とポルキエ医師はうなずきながらつぶやいた。「彼女は人生を遡っているんです。」
>
> マルトは前より細くなり、頬はバラ色に色づき、熱をおび、黒々とした、はっとするような眼をして、その数か月は不思議な美しさをたたえていた。顔は照り輝き、生を蕩尽する様子が存在全体から発し、彼女を熱いおののきで包み込んでいた。忘れられていた若さが40歳になってから彼女の体の中で輝かしい炎をあげて燃えているかのようだった。（『征服』　p.1102［邦訳p.281］）

「結核の場合、外にあらわれる熱は内なる燃焼の目印とされた。結核患者とは情熱に、肉体の崩壊に

つながる情熱に〈焼き尽くされた人〉とされたのである」というソンタグの文は、マルトの情況を的確に表現しているようだ（『隠喩としての病』、p.21［邦訳p.29］）。ただしそれはロマン主義的な肺癆患者の立場から見た場合のことであって、自然主義的な『征服』の語り手は激しい情熱の印の影に隠れて確実に進行していく病理的現象を見逃さない。そこで17章におけるマルトの病的症状の展開は急である。マルトは聖体拝領の最中に法悦のあまり気を失う。フォージャ神父が自らの前で告解することを許すと、感動のあまり泣き崩れ、神経発作を起こす。それが何度か繰り返されて、やがて深夜に大きな叫び声を発しながら、自傷行為をまじえた狂気の発作に襲われる。また女中のローズは錯乱（délire）や強硬症（catalepsie）を発症させているマルトを目撃する。臨終の場面でポルキエ医師が示したように、彼女の肺癆は神経症を併発していたというから、それが悪化して狂気にいたったとしても不思議はない。肺癆の併発症に狂気（aliénation mentale）を含める当時の病理学の権威すら存在している。[27] それはともかく、肺癆にせき立てられるような情熱は、まさしく病的異常さのゆえに決して幸福な未来を約束されることはなかろう。果たせるかな、マルトのフォージャ神父に対する情熱は報われない。それどころか20章では、彼女が決死の覚悟で断行した愛の告白は神父の手ひどい拒否にあい、それがきっかけのひとつとなって病をいっそうこじらせた彼女は死去するのである。

ここで再びソンタグの示唆に富んだ文を引用しよう。彼女曰く、「結核の神話によると、たいがい何かの情熱的な感情がまずあって、それが結核を誘発し、結核となって外化するのだという。」（『隠喩としての病』、p.23［邦訳p.32］）ここでは結核と情熱の関係が新たな角度から問われている。熱を生理学的に解釈して、それが肺癆故の結果だと捉える場合は、上述したように身体の異常性が精神に反映して情熱の異常性を際立たせていることになる。それに対してロマン主義文学のように、熱を心理的に優先させて捉えた場合には、情熱過多ゆえに、あるいは情熱を抑圧するがゆえに、それが身体に悪影響を及ぼして結核を発症させているのであり、したがって先とは逆転した形で因果関係の論理が働いていることになる。マルトの場合、肺癆の発症と恋愛感情の発生は時間的に後者の方が先んじているので、ゾラもまた肺癆と恋愛の関係をロマン主義的な発想に基づいて考えていたと見なせる。しかしあまり早急にこのような結論を下してはなるまい。マルトの恋愛のきっかけにはロマン主義的な単純無垢な恋心を見ることを憚られる点が窺えるからだ。

マルトの恋愛対象のフォージャ神父というのは、パリのナポレオン派が対立する王党派や共和派の影響力を排して南仏の要衝プラッサンでその支配を確実にしようと派遣してきた、権謀術数に長けた人物であった。彼がプラッサンにやって来てフランソワとマルトの夫婦のところに寄宿したことから、以前は幸せであったフランソワ一家の悲劇が始まる。またマルトが40歳になってから、幸せそうなブルジョワ一家を破滅させてしまうほど恋に狂うのは、フォージャ神父が彼女の恋心を刺激して、自らの野心に役立てようと目論んだからだ。フォージャ神父は最初にマルトの性格を見抜いて、それにつけ込んでいる。

> 彼女は自ら言うように、確かに幸せだった。しかし彼は、40歳に近づいて安定した、神経質な彼女の性質（nature）の中には、昔からの葛藤があることを見抜いたように思った。顔の似通った妻と夫によるこの家庭劇のことを想像してみると、二人は互いのことをよく知っているから互いにうってつけだと判断されるのだが、二人の存在の奥底では、私生児の酵母や、もつれ合い、反目をいつも繰り返す血のせいで、両者の異なった気質（tempérament）が対立を募らせている、

と思った。（『征服』、p. 971［邦訳p.101］）

ゾラの記している「気質」とは、人間の性質を生理学的に規定したもので、自然主義にふさわしい概念の一つに数えられる――これについては後で詳述する。その気質は定義に見合って遺伝に支配される。遺伝類型とともに「家系樹」に摘記されているマルトの気質的特徴を見ると、彼女の場合は「一世代を飛び越えた回帰遺伝。アデライド・フークに精神、身体ともに類似」（78年版）となっているが、93年版になるとこれに「ヒステリー患者」という記述が加わる。これらに先立つ未公開の69年版「家系樹」の記述では、「彼女は祖母アンリエット［アデライド・フークの旧名］と同じく頭がいかれている（toquée）」。アデライド・フークと言えば、「叢書」のルーゴン＝マッカール一族の始祖であるとともに、「起源の神経症」を患って一族に変性的遺伝疾患を拡散させた元凶でもある。そしてそのアデライド・フークの奔放な恋愛関係こそ問題で、当のマルトは彼女の一方の嫡子ルーゴンの娘、その夫フランソワは庶子ユルシュールの息子であった。つまりマルトの気質とその性質は遺伝のせいで因縁めいており、フォージャはそれを見抜いて彼女に働きかけ、一方で夫に対する反発を募らせ、他方で自らに対する恋愛感情を触発させることに成功したのである。

肺癆と恋愛の因果関係の問題をここで問い直せば、マルトの場合ロマン主義的肺癆観のように確かに時間的には恋愛が肺癆を誘発させるように叙述されている。しかしその恋愛や肺癆は本を正せばいずれも変性的遺伝を支配する神経症に通じており、マルトの場合は肺癆も恋愛も、ロマン主義的解釈とは異質な、やはり自然主義的な解釈にゆだねられていると言えるであろう。

肺癆と神秘主義的信仰　マルトの肺癆についてはもうひとつ、恋愛と表裏一体の宗教的情熱という問題が見られる。先に引用したマルトの臨終の場面は小説の最終章に当たる23章で描写されている。そこで言われていたマルトに肺癆の症状が露わになる３年前というのは、15章あたりで描かれている時期のことで、ここで初めてマルトの病気に関する言及が見いだされる。

> しばらく前からマルトが彼［フォージャ神父］を不安にさせていた。彼女を燃やす信仰熱（fièvre de dévotion）を鎮めることは不可能だと彼は感じていた。［……］彼女は内に抱えた炎（flamme）のせいで、体はぐったりし、肌は黒ずみ、目には隈を付けていた。それはまるで病気が拡大し、全身が恐慌を来して、脳も心臓も徐々に侵されてきたかのようだった。顔は恍惚とした表情に満たされ、手を伸ばせばそれは神経質に震えた。ときどき乾咳（toux sèche）が頭から足にいたる全身を揺すぶることがあるのだが、彼女は引き裂くようなその痛みを感じていないようだった。そして彼の方はいっそう手厳しくなって、彼に差し出される愛を退け、サン＝サチュルナン教会に来ることを彼女に禁止した。
>
> 「教会は凍えそうです」と彼は言うのだった。「あなたの咳はひどい。あなたの病気がもっと悪くなってはいけませんから。」（『征服』、pp.1074-1075［邦訳p.244］）

恋愛の際と同じように信仰の情熱についても、熱を生理学的に捉えることができる。生理学的に捉えられた熱というのは、言うまでもなく肺癆の典型的な症状に数えられる発熱症状のことである。引用中に現れたマルトの中で燃えている「信仰熱」は、最初彼女の信仰の度を超した熱心さを表す比喩

として書かれているのだが、それがいつのまにか生理的な熱と化し、彼女の肺癆を具体的に現す症状に変化している。後で付け加えられた「乾咳」が、その熱は比喩でなく明確な病状の表現であることを念押ししている。フォージャ神父のマルトの容態に対する心境はかなり複雑で、信仰熱ならむしろ歓迎すべきところだが、そこに彼に対する危うい情熱も感じ取れるため、マルトの熱をもっぱら病気の症状と見なそうとしている。こうした信仰と肺癆の熱として表現された心理的、生理的異常さの同時的発生については、あるいは同一現象に関わる心理的、生理的解釈については、『征服』の「草案」中で「マルトは宗教に心を奪われる」と「彼女はすでに肺癆を病んでいる」とが並んで記されていることから窺えるように、[28] ゾラは最初から意識していたようである。

信仰熱をこのようにいわば隠喩的でなしに生理的に解釈することは恋愛のところですでに検討してきたことと通底する。信仰についてもゾラはまた医者の視線を通して自然主義的理解を徹底しようとしていたようだ。医者のポルキエは、「その肺癆は神経病を併発しておりました」と言った。それに、マルトに見る異様な信仰行為、ゾラにとっては神秘主義的信仰が神経病のカテゴリーの中に入ることは、ポルキエのみならず『征服』以前からすでにゾラにとっては暗黙の前提だった。そのことは、ゾラが参考にしたモロー・ド・トゥールの『病的心理』（第二部３章１節）にはっきりと書かれている。それ以上に直截に、ゾラ自身が1869年の「家系樹」中で当初から神秘主義的信仰を遺伝病の一種と見なしていた。[29] その後もこの点についてゾラの考え方は一貫していて、セルジュについて1878年版「家系樹」の「神経症（névrose）の遺伝は宗教的偏執（manie）に変化する」から、1893年版では「神経症の遺伝は神秘主義的信仰（mysticisme）に変化する」へと若干の異同はあるが、少なくともマルトやその子セルジュの狂信的信仰が神経病のカテゴリーに属する病気と見なされていることに変わりはない。

前節で見てきたように、変性的遺伝疾患を唱える当時の亜流の病理学理論は神経症が肺癆に変化すると主張していたが、今度はそれがマルトが身をもって明らかにしたように肺癆から神秘主義的信仰に変貌するにいたる。ルーゴン＝マッカール家の始祖アデライド＝フークに端を発する神経症はこのようにして、世代を経るにしたがってそのプロテウス的変貌能力をしだいに発揮し始め、マッカール家のアルコール中毒と並んでムーレ家の肺癆から神秘主義的信仰やデジレに現象する痴愚までをも病的現象として包摂して、変性症理論の波及作用の大きさとそれに伴う社会的脅威の拡大を否が応にも浮き彫りにさせるにいたる。

ところで、肺癆と神秘主義的信仰の相関関係は、ゾラの『征服』に５年先立つ1869年に、すでにゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』で詳述されていた。マルトの場合のカトリック信仰への傾倒はむしろ彼女を利用しようと目論むフォージャ神父への情熱にも多分に依存しているので、ジェルヴェーゼ夫人の時のように、肺癆の重篤化が意識的な狂信行為のエスカレーションとして相乗的に現れるように描写されているわけではない。その点ではゴンクール兄弟の作品に比較して、ゾラの『征服』は説話上でのダイナミズムを欠くかもしれない。だが『ジェルヴェーゼ夫人』では説話のダイナミズムの陰で犠牲になったものもあることは確かだ。ゴンクール兄弟は説話の大胆さを追求しようとするあまり、当時の医学を濫用して行き過ぎた利用の仕方をしたと言えなくもない。[30] それに対してゾラは説話法でも自然主義に徹して、同時代の医学に忠実であろうとしていたと言えるのかもしれない。

『征服』に続いて1875年に発刊された叢書第５巻『ムーレ神父のあやまち』［以下『あやまち』と略記］の主人公セルジュ・ムーレは、上述のマルトの子供として彼女の遺伝的影響を受け、しかも彼女以上

に神父として神秘主義的信仰を露わにするにいたる。小説の主題自体が人間の自然的性行と規律の厳格なキリスト教の対立を浮き彫りにしようとしているので、セルジュの抱く信仰には狂信的性格がつきまとう。そして彼に死を余儀なくさせるのはやはり肺癆なのだが、それについては『あやまち』の中でなく、最終巻の『パスカル博士』になって初めてそれとなくパスカル博士の口を通して語らせているだけである（p.1016［邦訳p.128］）。したがって、マルトの場合と異なり、肺癆と神秘主義的信仰の関係はこの作品中で明白なかたちで言及されることはない。

ところで、セルジュは説話の重大な転換点に当たる第一部の最後で熱病によって昏倒し、記憶喪失という重大な後遺症を発生させる。「草案」から判断するなら、その熱病は腸チフス（fièvre typhoïde）である。(31) それにこの熱病は、セルジュの伯父であるパスカル博士に原始的自然に恵まれたパラドゥーで彼の看病をアルビーヌにゆだねるそもそもの原因となったから、肺癆とは比較できないほど、この小説における説話の展開に大きな影響を持っている。またセルジュを記憶喪失によって狂信的信仰から解放し、楽園パラドゥーでアルビーヌとともにアダムとエヴァを思わせるカップルとして自然を謳歌させるきっかけを作ったのだから、腸チフスは狂信と一体的な関係にあるとされていた肺癆とは正反対の役割を負わされていると言える。

遺伝類型と肺癆　ムーレ家にあってセルジュは最初の肺癆患者ユルシュールの孫に当たるのだが、セルジュの従妹でやはりユルシュールの孫であるジャンヌもまた彼女と同じく肺癆を患う。叢書第８巻『愛の一ページ』（1878年刊）は、そのユルシュールの二番目の子供であるエレーヌを主人公にいただき、彼女が医者アンリ・ドゥベルルとのあいだで起こすいわば不倫の恋愛を主題にしている。ジャンヌはそのエレーヌの娘で、1842年生まれ、思春期になりかけの12歳の時、「神経の発作」によって肺癆を急激に重篤化させると、それからまもなく早世してしまう。

先のユルシュール＝マルト＝セルジュの場合は親子関係で連続している。それで、肺癆は血縁を通じて出現していることになるので、遺伝の結果だと見なされても何ら不思議はなかろう。ところでユルシュールの娘エレーヌは遺伝類型から言うと「自発様遺伝」（innéité）と分類され、両親からの遺伝的な影響は識別できないと見なされる。そこで遺伝から見たジャンヌの肺癆は、祖母のユルシュールから母親のエレーヌを飛び越えてジャンヌのところに現れたことになり、俗に言う隔世遺伝である。しかしエレーヌの夫グランジャンも「肺癆に冒されやすい体質」（prédisposé à la phthisie）で彼女と結婚（1841年）後10年あまりたった1853年に「気管支炎」で死去している。それは娘の死からわずか２年前に起こった出来事であった。(32) ジャンヌの遺伝類型に関しては後述するが、その遺伝類型を云々する前に、ジャンヌがすでに家族病としての肺癆を抱え込む家庭環境にあったことは留意しておかなければならないだろう。

さて、物語も終盤に近づいた頃、死に瀕した少女の診断を終えたところで、母親エレーヌの情人であった医者のドゥベルルが心中でこんな所見を語っている。

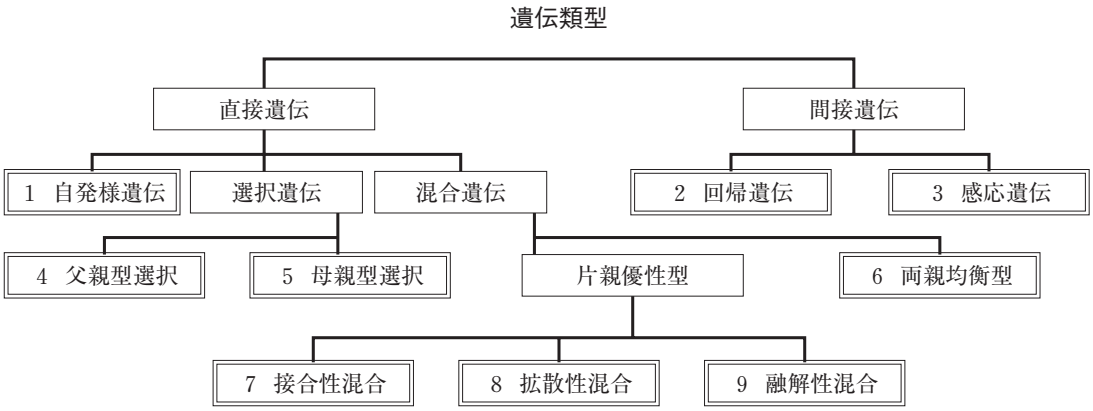
> 男は急性肺癆（phtisies aiguës）の電撃的な進行の経過を思い浮かべていた。それは、彼がこれまでに多くの時間を割いて研究してきた症例のひとつだったのだ。粟粒結核（tubercules miliaires）は大変な勢いで増殖していくはずだ。呼吸困難が進行し、ジャンヌはおそらく三週間とはもたないだろう。(33)

「粟粒結核」というのは結核の一種で、現代のたとえば『最新医学大事典』（医歯薬出版）によれば、結核菌が血液によって全身に広がって、多くの臓器に結核結節を作り出す重篤な症状を指す。ゾラの時代にはどうだったかというと、ドゥシャンブルらによる100巻本『医学百科辞典』の「肺癆」の項では、コッホの結核菌発見（1882）前夜に当たる頃の粟粒結核に関する症候学の情況が詳述されている。そこでは慢性肺癆と対置される「急性肺癆」の別名として粟粒結核は二種類に区別される。ひとつは高熱を特徴とし、腸チフスを想起させる、多臓器に粟粒結核を生じさせる型、つまり「全身性粟粒結核」で、もうひとつは肺－気管支を特に傷害させることによって、前者の血液感染に因るよりも、呼吸器感染が顕著であることを指し示す型「肺－気管支粟粒結核」である。(34) 上述のジャンヌの粟粒結核は、ドゥベルルと同じく彼女の診断をした老医師ボダンが腸チフスとの間で診断を躊躇していたことから分かるように、前者に分類される。

「叢書」中でルーゴン＝マッカール家に属する肺癆患者は以上の４名だけであるが、そこでわれわれはムーレ家の系統だけが肺癆患者を続出させているという歴然たる事実を見せられたわけである。何度も繰り返すが、この時代にはまだ肺癆は遺伝病と見なされていた。したがって、I章で見てきたデュビューシュやギローの家族と同じようにムーレ家の何人かが肺癆を患い、肺癆が遺伝を通して家族病の様相を呈するにいたったのだとしても特別視するようなことではないだろう。だがその遺伝病としての肺癆がどうしてムーレ家以外のルーゴン＝マッカール一族に広がらないのか。そこでわれわれは、ムーレ家だけに肺癆患者を限定させるためにどのような合理的なメカニズムがはたらいているのかを問わなければなるまい。また同時にそこに何らかの説話論的意図が隠されているのではないかと疑っておくことも必要だろう。

「ルーゴン＝マッカールの家系樹」には家系に属する個々の人物について――健康であった者を除いて――遺伝病やそれとおぼしき病気の簡単な記述が掲載されていた。またそこには遺伝の症例記述のほかに、リュカの『遺伝概論』に基づいて、(35) 構成員全員について洩れなく身体と精神の両面に関する遺伝類型が書き加えられていた。

その遺伝類型を「家系樹」などから帰納的に推論してみると、(36) まず父母の形質が直接子供に反映する直接遺伝、おじやおばの形質が反映する間接遺伝の二つに大別される。間接遺伝には、通称〈隔世遺伝〉（atavisme）と称される⑵〈回帰遺伝〉（hérédité en retour）、⑶〈感応遺伝〉（influence）が挙げられる。直接遺伝にはさらに三段階の下位分類があり、まず第一段階が⑷父親型か⑸母親型の、どちらかの〈選択遺伝〉（élection）か〈混合遺伝〉（mélange）、それとどちらにも似ずまるで自然発生的に生じたかのような⑴〈自発様遺伝〉（innéité［＝combinaison］）に分かれる。混合遺伝については第二段階で両親の遺伝形質が均衡して混合している⑹両親均衡型とどちらか片方の親の遺伝形質が優っている場合があり、後者について第三段階としてその混合度の粗密に応じて⑺〈接合性混合〉（soudure）、⑻〈拡散性混合〉（dissémination）、⑼〈融解性混合〉（fusion）という三つに区分される。これらの遺伝類型は「家系樹」とまったく同じような次のようなツリー上の概念図として表すことができる。別に考察を要することだが、家系や遺伝類型で図式化が可能なように、こうしたツリー状の思考パターンこそがゾラの叢書の体系を根本で規制しているのであろう。



ルーゴン＝マッカール家の「家系樹」に掲載され「叢書」に登場している人物たちは、上で図示した九つのタイプ（二重枠部）のどれかに属していることになる。(37)

こうした遺伝類型やその基になった遺伝理論は、まもなく陽の目を見るメンデルの近代的な遺伝理論によって否定され、現在では学説史上の価値しかもっていない。ここで特に驚かされるのは「3　感応遺伝」という類型で、たとえばナナ（正式な名前はアンナ・クーポー）のように「身体的に」見ると、実の父親クーポーでなく、母親ジェルヴェーズの最初の恋人ランチエ似とされている。ただしこの感応遺伝という概念も『19世紀ラルース』の第2補遺の「遺伝」の項で堂々と言及されているところをみると、当時は半信半疑ながらも理論的には認められていたようだ。ところでここで現代科学の高みから当時の遺伝理論が抱える欠陥をそれもゾラの小説に関して難詰してみても話は始まらない。『パスカル博士』でパスカルが自分で作成した「家系樹」のことを、「自ら定めた遺伝法則が明確で完璧に適用されている」「このような全体、ひとつとして欠陥のない、決定的で完璧な記録資料は美しいと思わないかい？」(38) と述べたとしても、それはわれわれにとってあくまでも遺伝理論上のことではなく説話論上のこととして理解しておかなければなるまい。

さて「家系樹」では、ユルシュールの遺伝類型は「精神的に母親が優勢の」「7　接合性混合」型に分類され、「身体的にも母親に類似している」。その母親アデライド・フークの方は、「気が狂ってチュレットの精神病院に1851年に入院すると、1873年にそこで脳卒中に倒れて105歳で死去する」［1893年版「家系樹」］。このアデライド・フーク（ディードおば）こそが一族全体に影響を及ぼす「起源の神経症」を患っていたのであった。そしてすでに引用した通り、「ユルシュールは1839年に死んだ、［……］それで兄の不吉な予言を現実のものにしてしまった。母親の神経症が彼女にあってはゆっくり進行する肺癆に変わり、それが彼女を徐々にむしばんでいった。」

元々はムーレ家の血を受け継いでいないが、夫のフランソワの従妹でムーレ家に嫁いできたマルト、彼女の遺伝類型は「一世代を飛び越えた［2］回帰遺伝。アデライド・フークに精神、身体ともに類似」と先のユルシュールの場合と同じように、ディードおばに結びつく。1893年版の「家系樹」によると「神経発作を呈して死去」としか記されていないが、われわれが見たように、彼女の死因は肺癆であった。

セルジュの遺伝類型は「［8］拡散性混合型。精神的、身体的に母親の特徴をより際立たせた類似を示す。神経症の遺伝は宗教上の偏執性狂気［78年版］／神秘主義的信仰［93年］に変化する」とさ

れ、問題のセルジュに支配的な影響を与えることになったのは母親のマルトの方であり、セルジュは遺伝的に言うと母親を介してやはり一族の起源であるディードおばに繋がる。彼はパスカル博士が「家系樹」を書いた時点では存命中ということなので、1893年版「家系樹」に彼の死に関する記述はない。ただしパスカル博士が小説の本文中でセルジュは肺癆による死を余儀なくされていると報告していた［前出89ページ］。

ジャンヌは「二世代を飛び越えた［２］回帰遺伝。アデライド・フークに精神、身体ともに類似」。マルトの場合とまったく同じように「回帰遺伝」によって彼女はディードおばと結びついている。なお彼女については1893年版「家系樹」に「神経の発作を起こしたあと、1855年に死去」という文が付け加えられているが、神経病が直接の死因なのではなく、すでに見た通り急性肺癆が彼女の命取りとなった。

ムーレ家に属する四人の肺癆患者、ユルシュール、マルト、セルジュ、ジャンヌにおける遺伝類型を通してみると、いずれもルーゴン＝マッカール家の祖先アデライド・フークに結びつき、彼女の神経症の影響を直接・間接に色濃く受けている。そして共通しているのは彼らが肺癆によって死去したことである。とは言っても、一方では、すでに述べてきたように、ディードおばの神経症は様々な現れ方をし、彼女の遺伝疾患がいつでも肺癆に変化するとは限らないし、また他方ではムーレ家の中にも、たとえばシルヴェールのように例外的に肺癆を免れている人物も存在している。

このシルヴェールは「母親の［５］選択遺伝」。したがって母親のユルシュールを介して甥のセルジュのようにディードおばに結びつくのだが、それでも遺伝病としての肺癆に罹ることはなかった。けれども彼は故郷プラッサンが1851年のナポレオンのクー・デタ騒ぎに巻き込まれると、共和派に与して闘い、憲兵の凶弾に倒れた。まるでディードおばの遺伝病がセルジュらとは別の形で彼の運命を支配していたようだ。したがって、ディードおばの遺伝病は彼にあっては他のムーレ家の肺癆患者たちと異なって一見何らの影響も及ぼしていないようなのだが、しかし様態は異なるとは言え、シルヴェールもまた他のムーレ家の人々と同じようにディードおばの遺伝的影響を受け、同じように死去して家系を絶やすいたったという結果に対して、やはり説話上の意図を考慮しておかなければならない。

その共通点についてすこし詳しく見てみよう。フランソワとマルトの家庭には３人の子供がいた。そのうち母親のマルトを通して遺伝的にディードおばにつながる二男のセルジュは司祭として独身のまま死ぬであろうし、その妹のデジレは「神経症が痴愚（imbécilité）として遺伝」したので、子供を産むことなどとても望めるような状態ではない。事実『パスカル博士』の時点でも、兄セルジュのところに身を寄せたままで、結婚とか出産という類の情報は全くない。ユルシュールの生んだ３人の子供のうち、長女のエレーヌは「自発様遺伝」なので、ディードおばに結びつくことはない。しかしエレーヌの娘ジャンヌは「回帰遺伝」によってディードおばの不吉な影響を免れがたく、12歳で早世してしまった。エレーヌはジャンヌと死別した後ランボー氏と再婚したのだが、二人のあいだに子供はできなかった。ゾラはそのことについてわざわざ触れて、「それは一種の罰のようだ」と書き残し、(39) 彼女のところでも家系が断たれることを強調している。ユルシュールの二男だったシルヴェールが銃殺されたのは17歳のときで、もちろん彼に子供はいなかった。

結局、ムーレ家の中ではフランソワとマルトの長男オクターヴだけが一男一女をもうけ、家系を途切れさせることはない。オクターヴがムーレ家の中でただ一人このような特権を享受しえた理由は、遺伝の観点からすると彼だけが「父親の選択遺伝」で、またその父親のフランソワが同じ「父親の選

択遺伝」なので、ディードおばからの悪影響を回避できたからだ。そしてオクターヴの血筋が将来的にもムーレ家の未来を担えることを約束するのは、彼の結婚相手で彼の子供たちの母である「ドゥニーズ・ボーデュが健康で精神的に安定している」（1893年版「家系樹」）と遺伝的に保証されているからである。

このように一族の消長を恣にしている遺伝を前にして、「叢書」において肺癆の果たしている説話的機能を問い直すと、肺癆というのは変性的疾患のひとつとして呪われた自らの家系を自滅に追いやるように働いているということである。この点で肺癆と比較すべきなのはマッカール家をむしばんだアルコール中毒である。

叢書第7巻『居酒屋』（1877）の主人公クーポーとジェルヴェーズの夫婦は二人ともアルコール中毒による悲惨な生涯を遂げた。最初にジェルヴェーズとその恋人ランチエとのあいだにできた子供たち、クロード（第14巻『作品』、1886）、ジャック（第17巻『獣人』、1890）、エチエンヌ（第13巻『ジェルミナル』、1885）、またクーポーとの間に生まれた娘アンナ（ナナ）（第9巻『ナナ』、1880）は、子孫を残さなかったか（ジャック）、子供をもうけてもすぐに死ぬか（クロードとアンナ）、あるいは最終的にニューカレドニアに渡ってその地で結婚したため消息不明となり（エチエンヌ）、現実的に「家系樹」上で子孫を絶やす結果となっている。このようにマッカール家のなかでアルコール中毒に冒された子孫が第五世代で壊滅すること、ムーレ家の肺癆患者たちが第四世代で根絶やしにされてしまうこと、それはアルコール中毒症と肺癆が「叢書」中でいみじくも同じような自然淘汰の否定的原理として機能していることを指し示しているのである。(40)

気質と肺癆　病気の原因がまだ科学的に明らかにされていない場合、病気が遺伝のせいだということと並んで患者の性格が引き起こしたとする見方も一般的にはよくされることである。これと同じ時代的情況の中で、肺癆についてもやはり遺伝と並んで、性格が問題とされるのは必然的な成り行きだろう。それについてソンタグは肺癆と性格の単なる関連だけでなく、さらに病因論的なところまで踏み込んで、「近代以降の病気（昔の結核）について言えば、病気は性格（character）を表現するというロマン派的な観念は、どうしても拡大されて、性格が病気を引き起こすという主張に通じてしまう」（『隠喩としての病』、p.47［邦訳p.70］）と指摘している。ゾラの「叢書」の肺癆も性格と無縁ではない。ただし彼の場合性格はもっと生理的に、自然主義的に捉えられて、性格は「気質」（tempérament）として格上げされ重要性を強調されることになる。

そこでまずこの時代の一般的な気質に関する定義を見ると、当時の気質の定義は生理学的という近代的な装いを凝らしているが、旧弊なヒッポクラテスの体液の考え方を多分に引きずっている。『19世紀ラルース』によると、気質は血液（sang）過多の「多血質」（sanguin）、神経（nerfs）の勝る「神経質」（nerveux）、胆汁（bile）の優勢な「胆汁質」（bilieux）、そして最後にリンパ（lymphe）過多の「粘液［リンパ］質」（lymphatique）という、四種類に分類される。ちなみにそれ以前の時代だと、「神経質」やリンパに左右される「粘液質」の代わりに、粘液（pituite）の優勢な「粘液質」（f［ph］légmatique）、黒胆汁（atrabile）過多の「憂鬱質」（mélancolique）があって、それらの方が後の二者よりも一般的であったようだ。気質の構成要素である体液や神経ならだれにも見られるように、『19世紀ラルース』は、この定義の最後で四つに大別される気質も純粋な形で存在するのはまれであると、留保を付け加えることを忘れていない。(41)

ゾラは「叢書」以前、『テレーズ・ラカン』の「第二版への序文」で文学作品における気質の意義をすでに強調し、また「叢書」第１巻『繁栄』の序文においても繰り返しそれに言及して、彼にとって気質が説話法上の重要な構成要素であることを公言していた。(42) さらにその序文では、気質の重要性を指摘してから、基本的な四気質の中でとりわけ「多血質」と「神経質」を特に話題にする。

> 生理学的に彼ら［ルーゴン＝マッカール家の人々］は、神経と血液に因る偶発症候（accidents nerveux et sanguins）の緩慢な連続を形成している。それは最初の器質障害（lésion organique）に続いて一族の中でさまざまに発病し、また家系に属する各人のところではそれぞれの環境にしたがって、感情、欲望、情熱というような、ありとあらゆる人間的、自然的、本能的な表現を決定づけている。その結果生じてくる事態が美徳と悪徳などおきまりの呼称を頂戴するのである。（『繁栄』、p.3［邦訳pp.2-3］。傍点は筆者）

『19世紀ラルース』に記された気質とゾラの「叢書」の気質との間に並行関係を見ようとすれば、「多血質の人々の際立った特徴として愛の快楽を求める傾向がある」ということからルーゴン家の人物たちのことを思い浮かべることができるし、また「神経質な気質を持った人々の中に、身体・精神的な昂揚から極端な意気消沈と無感覚へ突如変化することほど共通に見られる特徴はない」という記述から浮沈の極端なマッカール家の一族をすぐに想起させられる。

おおよそルーゴン家に優勢な多血質、マッカール家に顕著な神経質に対して、ここまで肺癆患者として問題してきたムーレ家は気質的にはどのように規定されるだろうか。『19世紀ラルース』には四気質に特徴的な疾病についての記述がある。多血質なら充血や出血など血液に関係する病気。神経質な人々はもちろんヒステリー、ヒポコンドリー、精神病など、神経に関わる神経症である。肺癆に関わる記述では、「粘液質の人々は瘰癧、佝僂病、肺の結核結節形成（tuberculisation pulmonaire）に陥る素質を有している」とされる。性格が病気を引き起こすというロマン主義の因果関係的思考を決定論的に適用しようとした場合、肺癆を罹患するという特徴を持ったムーレ家の人々は、「他の気質の人々ほど感覚が鋭くなく、それに普通決断をするのが非常に遅い」（『19世紀ラルース』）と記される粘液質に分類されることになる。しかし上で引用した気質に関するゾラの文章によれば、血液と神経に対して粘液質の基本的構成要素であるリンパは考慮の対象とされていない。

そこで実際に「叢書」中の気質の使用例を拾うと、「粘液質」を指す単語は《lymphatique》よりも古い方の《flégmatique》が使用されている。しかしそのいずれの使用もムーレ家の人々を対象にしているのではない。そもそも肺癆という病気をディードおばの神経症から転化した変性的遺伝疾患と想定し、「ある人物から別の人物へ数学的に導かれる一本の糸を見いだしそれを追跡しようと努めよう」として遺伝の法則性に「叢書」全体の指導原理を見ている限り、ムーレ家の人々の気質を規制しているのはマッカール家の人々と同じく神経だと考えるほうが整合的であろう。それを裏書きするように、作品中で神経症的症状を呈することが多いマルト（『征服』）、セルジュ（『あやまち』）、ジャンヌ（『愛の一ページ』）に関しては、彼らの性格や挙措動作の描写に《nerveux》やその同族語が頻出して神経質的気質が強調され、特にセルジュについては「非常に神経質な気質」（『征服』、p.1037［邦訳p.193］）と直接に気質がはっきり記述されている。

そこであらためて気質と病気の関係を問い直してみると、ゾラや『19世紀ラルース』は、血液と神

経そのものを病気を発生させる要因のひとつに挙げているにしても、単純に神経や神経質がたとえばヒステリーに直結すると、また血液や多血質ならヒステリーを発症しないと考えているわけではない。加えて、個々人が唯一で純粋な気質に限定され、さらにそれを終生持ち続けると想定しているのでもない。つまり体液などの気質の構成要素と気質との関係、あるいは気質と病気との関係は機械的で決定論的な因果関係で結ばれてはいないのである。これをミシェル・セール風に表現してみれば、[43] 神経や血液はたしかに「叢書」の登場人物たちの気質や病気の構成要素として、言い換えれば実験小説の素材として不可欠だが、結果として現象してくる気質や病気にいたるには偶然と選択とからなる過程があって、環境などの様々なパラメーターの影響を蒙らざるをえないので、両者の関係を因果関係で考えるとしてもそれは確立論的な関係にあるとしか解釈しえないのである。

したがってムーレ家の肺癆と気質の関係は性格が病気を引き起こすというような単純で直線的な因果関係の中で捉えるのでなく、むしろ気質を説話的機能と関連づけて考え、その上で肺癆を問題にする方が自然主義の気質のとらえ方として有効であろう。「叢書」に先立って書かれた『テレーズ・ラカン』（1867）の中に気質が果たす説話的機能を明示した語り手のことばがある。そこで気付かされるのは、Ｊ－Ｌ・カバネスの指摘するように、[44] 気質の相補関係と拮抗関係がテレーズとロランのカップルに魅力と反目の愛憎関係を演出していることである。

> テレーズの、そっけなく、神経質な性質（nature nerveuse）が、ロランのずぶとく、多血質な性質（nature sanguine）に、異様な影響を及ぼしていた。かつて、情熱にかられていた時期には、ふたりの気質（tempérament）の差異が、むしろこの男女を力強く結ばれたカップルにして、それぞれの肉体を補完し合い、その間で一種のバランスを形成していた。男が血液を女は神経を与えていた、[……]。だが、その調子が狂ってしまったのだ。テレーズの興奮しすぎた神経が、相手を圧倒してしまったのである。いつのまにかロランは、異常な神経興奮症（éréthisme nerveux）におちいっていた。若い女の強烈な影響で、彼の気質は、少しずつ、急性の神経症にさいなまれる少女のごとき気質になっていった。このようにして、ある一定の状況でときにある種の身体に生じる変化を研究するのは、興味深いことであるにちがいない。[45]

「叢書」中で、『テレーズ・ラカン』のように異なる気質の関係を説話法として利用し、肺癆にいたる過程を描く代表的な小説と言えば、フランソワとマルトの夫婦が登場する『征服』であろう。一方のフランソワは「血液過多で少しばかり鈍重」（『繁栄』、p.133［邦訳p.163］）だった。彼の気質については1869年版の「家系樹」でもすでに「多血質（tempérament sanguin）」とはっきり規定されていた。他方でマルトはディードおばから「回帰遺伝」で神経症を受け継いで、肺癆と併せて神経病を発病し、1893年版の「家系樹」で「ヒステリー症」と記されるように、気質的には神経質の典型である。すでに「肺癆と蕩尽の情熱」の節で述べたように、表面的には「夫婦は互いに似通い」（1878年版・1893年版「家系樹」中のフランソワに関する項）、夫婦仲は平穏であった。だがフォージャ神父が、「二人の存在の奥底では、私生児の酵母や、もつれ合い、反目をいつも繰り返す血のせいで、両者の異なった気質が対立を募らせている」ことを見抜き、マルトの気質に働きかけることによって、恋愛感情を刺激し信仰心を吹き込んで狂わせたあげく、ついに彼女に肺癆故の死を余儀なくさせたのだった。

『愛の一ページ』のジャンヌの場合も、彼女の運命を暗転させるのに気質が大きく関与する。ジャンヌはマルトと同じで「回帰遺伝」によってディードおばの神経質な気質に分類される。『19世紀ラルース』によれば、神経質に属する性格的な特徴に「ねたみ」（envie）がある。ジャンヌの性格的な特徴を強調するためにもっともよく利用される語の一つは、その「ねたみ」の同義語である「嫉妬深さ」（jalousie）である。第１章で神経発作を起こした娘ジャンヌについて、母親のエレーヌが駆けつけたドゥベルル医師に対して、「とても繊細で、とても神経質（nerveuse）な娘なんです……いつも言うことを聞かせられるわけではありません。ほんの些細なことでも、この子は喜んだり悲しんだりして、それがわたしには不安でしかたないのです。感情の起伏が激しくて……わたしをとても愛してくれているのですが、わたしがちょっとよそのお子さんをなでただけで、しゃくりあげて泣きだすくらいやきもちやき（jalousie）なのです。」（『愛の一ページ』p.809［邦訳p.20］）と、紹介している。

作品もそろそろ終わりに近づいた頃、一緒に連れて行って欲しいという娘の哀願を振り切って、母親のエレーヌはドゥベルル医師との密会の場に赴く。家に一人取り残されたジャンヌはその時激しい嫉妬を感じながらも、そのせいで想像をたくましくする。

> けれども、彼女は顔面を蒼白にしながら、そうだったのか、と思い当たることがあり、少しずつ嫉妬深い怒り（colère jalouse）に満たされていった。母親には自分以上に愛する人たちがいて、わたしのことをあんなに激しく突き飛ばしてまで、その人たちのもとに走ったのだ。そう思った瞬間、少女は両手を胸に押し当てた。今は、もうすっかり分かってしまった。ママはわたしを裏切っているのだ。（『愛の一ページ』p.1030［邦訳pp.429-430］）

ジャンヌは唯一の絆である母親から捨てられたという深い絶望に陥る。それから自暴自棄になり、窓から吹き込む雨になおも打たれ続けるとやがてそのまま昏倒した。これが彼女には命取りだった。その後すぐ急性肺癆を発症して、彼女は急逝する。

ジャンヌの場合、ロマン主義文学が表現したように、性格が直接肺癆に結びついたのではない。彼女が急性肺癆に倒れるためには、彼女の最愛の対象でまた唯一の支えであった母親のエレーヌが医者のドゥベルルと不倫に走るという重大な契機が必要不可欠であった。それが原因となって彼女の気質を規制する神経がひどく揺すぶられ、その致命的な結果として急性肺癆に倒れたのである。ジャンヌの神経質な気質は環境の課す偶然と選択の過程を経てその気質に親和的な病気である肺癆を引き起こすにいたった、そのような過程を生理学に描写することこそがロマン主義作家とは立場に異にする自然主義作家たるゾラの真骨頂であったと言えそうである。

Ⅲ　結語

本論の出発点は、ゾラの「叢書」に相当数見いだされる肺癆の記述が文学に造詣の深い医学史家たちから無視され、またソンタグのあの『隠喩としての病』にも一言も言及がなかったことから湧いてきた疑問であった。たしかにゾラが「叢書」中で肺癆の遺伝病説を感染病説に変えてしまったことは、簡潔でなおかつ実証的な記述を求められる医学史の立場からすれば、彼に対する言及をためらわせる要因であったにちがいない。だがそのような医学史の観点を離れて文学史の立場に立つとすれば、わ

れわれが詳細に検討してきた通り、ゾラの肺癆は黙殺して構わないどころか、ロマン主義的肺癆観とは別の自然主義的肺癆観を示す特記すべきものと言ってよい。にもかかわらず、ゾラの肺癆は現実には、一部のゾラ研究者をのぞいて、一般的にそれにふさわしい扱いをされてこなかったのである。

ゾラの肺癆を無視してきたソンタグを筆頭とする文学批評家たちの軽率さを非難しても何も始まらない。それよりもわれわれはどうしてこのような事態にいたったのか、そうした見落としを許すような特質をゾラの肺癆が抱えていたのではないかと問うことの方が結果的に有益であった。

ムーレ家に集中していた肺癆患者たちの中で特にマルトとジャンヌに関しては、彼女らが早すぎる死を余儀なくされただけに、致命的な死病である肺癆の果たす役割は大きかった。しかし肺癆の文学的な価値というのは、いうまでもなくそれが登場人物の生命を断ち切ったことによって量られるわけではない。作品中で肺癆がどれだけ物語の展開を左右したか、要するに説話的な価値によってその重要性を判断しなければならない。

マルトの場合はかなり早くから肺癆の疑いは兆していたのだが、彼女を死へと追い込む際に前面に出て説話を先導していたのはむしろフォージャ神父に対する異様な情熱、それと綯い交ぜになった狂信的信仰であった。それに対して肺癆はそうした情熱と狂信を舞台裏でささえる生理学的な解釈の役割に甘んじていた。ジャンヌの場合、急性肺癆は作品の終盤に出てきて、彼女の命を奪って物語を閉じさせるという意味では重要だが、最初から作品の説話を左右するというものではなかった。個々の作品を取り上げてみる時、残念ながらゾラの肺癆は、バルザックの『あら皮』、デュマ・フィスの『椿姫』、ゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』における肺癆ほどの迫力を持っていなかったことは否定できない。その点では大方の批評家たちが示したゾラに対する否定的反応はある程度いたし方ないことかもしれない。

ところがこうしたまとめ方からは、ゾラの「叢書」における肺癆の際立った特徴が欠落している。ゾラの肺癆というのはルーゴン=マッカール一族の始祖ディードおばに起源を発する変性的遺伝疾患とみなされる点に特徴があったはずだ。変性的遺伝疾患としての肺癆は、「叢書」中でマッカール家の子孫を苦しめたアルコール中毒と同じように、ムーレ家の肺癆患者たちを死に追いやり、その子孫を絶やさせた。死去したムーレ家の肺癆患者たちというのは遺伝を通してディードおばのプロテウス的な不吉な神経症を受け継いだものたちばかりであった。したがって起源の神経症を介して見れば、死病として発現する肺癆は自滅の原理として機能している。またルーゴン=マッカール家全体の消長を見渡せば、ディードおばの呪われた遺伝病を拭い去るための、自然淘汰の原理として機能している。

ゾラの「叢書」における肺癆というのは、このように「叢書」全体を通してみた時、言い換えればディードおばに始まる『ルーゴン=マッカール家の人々』という一個の大河小説として見た時、それが持つ特徴的な説話機能の全貌を初めて明らかにしてくる。肺癆は第三の一族であるムーレ家の人々の運命を支配し、死病として一族の呪われた遺伝の種子を最終的に断絶させるように物語を誘導した。この時肺癆は本来の病理学とは無縁の変性症遺伝と自然淘汰といういわば亜流の科学的論理に取り込まれてしまっているが、にもかかわらず神話的な効果は十分に発揮している、ということはとりもなおさず説話的な機能を十分にはたしている。「叢書」の肺癆に特徴的なこのような説話的機能は、個々の作品を拾い読みするだけではなかなか把握しがたいことだ。ゾラの肺癆が慧眼な批評家たちの眼に留まらなかったのはどうやらこのあたりに原因がありそうだ。最後に付言するなら、小論のもつ意義というのは、肺癆に関してそうした見落としを補完しえたところにあるだろう。

〈対象テクストの邦訳〉

本論ではゾラのフランス語原典とともに下記の邦訳テクストを参考にした。訳者の方々には御礼を申し上げたい。ただし引用個所の訳文については、邦訳テクストをほとんどそのまま借用したものから、病名を中心に本論の文脈と整合させたため、元の邦訳とはかなり異なったものまである。それについてはいちいち記さないが、本論中には参考のため邦訳テクストの該当ページをカギ括弧で付しておく。

1．*Thérèse Raquin*：『テレーズ・ラカン』宮下志朗訳、『初期名作集』所収、藤原書店、2004年
2．*La Fortune des Rougon*：ルーゴン=マッカール叢書第１巻『ルーゴン家の誕生』［本論では『ルーゴン家の繁栄』］伊藤桂子訳、論創社、2003年
3．*La Conquête de Plassans*：叢書第４巻『プラッサンの征服』小田光雄訳、論創社、2006年
4．*La Faute de l'abbé Mouret*：叢書第５巻『ムーレ神父のあやまち』清水正和・倉智恒夫訳、藤原書店、2003年
5．*Une page d'amour*：叢書第８巻『愛の一ページ』石井啓子訳、藤原書店、2003年
6．*L'Œuvre*：叢書第14巻『制作』上・下［本論では『作品』］清水正和訳、岩波文庫、1999年
7．*L'Argent*：叢書第18巻『金（かね）』野村正人訳、藤原書店、2003年
8．*Docteur Pascal*：叢書第20巻『パスカル博士』小田光雄訳、論創社、2005年

【注】

（1）ルネ・デュボス、ジーン・デュボス『白い疫病――結核と人間と社会』北錬平訳、財団法人結核予防会、昭和57年、pp.65-67［Original edition: Rene & Jean Dubos, *The White Plague. Tuberculosis, Man and Society,* Little, Brown and Company, Boston, 1952］。Pierre Guillaume, *Du désespoir au salut: les tuberculeux aux 19^{e} et 20^{e} siècles,* Aubier, 1986, pp.99-101.

（2）Émile Zola, *L'Œuvre in Les Rougon-Macquart. Histoire naturelle et sociale d'une famille sous le second Empire,* t. IV, coll. Pléiade, Gallimard, 1966, p.313［邦訳下巻 p.226］. 以下本作品からの引用は作品名を『作品』と記し、引用ページを付加するだけにとどめる。

（3）「瘰癧」は別名「腺病」とも言われたが、現在は「頸部リンパ節結核」の名称を与えられ、結核菌がリンパを介して頸部リンパ節に侵入して起こる結核の一種として定義づけられている。この頃はまだ依然として「瘰癧」は「肺癆」とは独立した別の疾病と見なされていた。『19世紀ラルース大辞典』の「瘰癧」に関する項も、1890年発行の「第２補遺」になって初めて、両者の同一性が疑われ出したことを記している。

（4）Les notes（NAF10316, f^{os} 1-3［*Le plan général*］et 219）d'Émile Zola *in Op. cit.,* pp.1363-1364. 清水正和『ゾラと世紀末』、国書刊行会, 1992、pp.47-51.

（5）Émile Zola, *Docteur Pascal in Les Rougon-Macquart,* t. V, coll. Pléiade, Gallimard, 1967, p.955［邦訳p.49］. 以下本作品からの引用については『パスカル博士』と作品名を記し、引用ページを付加するだけにとどめる。

（6）La note d'Émile Zola, *in Ibid.,* p.1581.

（7）Pierre Darmon, *L'homme et les microbes, XVII^{e}-XX^{e} siècle,* Fayard, 1999, pp. 168-169［ピエール・ダルモン『人と細菌』寺田光徳・田川光照訳、藤原書店、2005年、p.231］.

（8）*Ibid.,* pp.98-99［邦訳pp.132-133］et Pierre Guillaume, *Op. cit.,* pp.108-114.

（９）Émile Zola, *La Conquête de Plassans in Les Rougon-Macquart.* t. I, 1960, p.1201［邦訳p.418］.以下本作品からの引用は作品名を『征服』と略記し、引用ページを添えるだけにとどめる。

（10）Henri Mitterand,《Étude》*in Ibid.,* p.1651.

（11）J. Moreau de Tours, *La Psychologie morbide dans ses rapports avec la philosophie de l'histoire ou De l'influence des névropathies sur le dynamisme intellectuel,* Victor Masson, 1859, p.105. 傍点個所は原著ではイタリック。

（12）Émile Zola, *L'Argent in Les Rougon-Macquart,* t. V, *Op. cit.,* p. 182［邦訳p.248］.

（13）*Ibid.,* p.395. なお『金』の時代設定は1864年から1869年である（La note d'Émile Zola, *in Ibid.,* pp. 1271-1272）。

（14）Y. Malinas, *Zola et les hérédités imaginaires,* Expansion Scientifique Française, 1985, p.137-138.

（15）Susan Sontag, *Illness as metaphor,* Penguin books, 1991（1st publishing in 1978）, p.69［邦訳『隠喩としての病』富山太佳夫訳、みすず書房、1982年、p.102］. 以下本書からの引用は書名を記して、引用ページを付加するにとどめる。なお訳文は以下も同じく上記邦訳書から借用した。

（16）否定的な評価と肯定的な評価はそれぞれ下記の文献に見出すことができる：Alain Contrepois, *L'invention des maladies infectieuses. Naissance de la bactériologie clinique et de la pathologie infectieuse en France,* Éditions des archives contemporaines, 2001, pp. 107-108 et Y. Malinas, *Op. cit.,* p. 139-140.

（17）Émile Zola, *La Fortune des Rougon, in Les Rougon-Macquart.* t. I, *Op. cit.,* p.132［邦訳p.161］. 以下本作品からの引用は作品名を『繁栄』と略記し、引用ページを付加するにとどめる。

（18）「ルーゴン＝マッカール家の家系樹」は1869年の二つの版（La note（NAF 10345, f°130）d'Émile Zola, *in La Fabrique des Rougon-Macquart. Éditions des dossiers préparatoires,* pub. par Colette Becker avec la collab. de Véronique Lavielle, Honoré Champion, 2003, pp. 158-163 et La *Les Rougon-Macquart,* t. V, *Op. cit.,* pp. 1777-1779）、それから1878年に『愛の一ページ』とともに発表されたもの、1893年に『パスカル博士』とともに発表されたものと、都合四つを数える。そのうち1869年の二つは出版社ラクロワにゾラが叢書の構想を示す際に手渡されたもので、一般には公表されなかった。またその時は執筆前ということから登場人物名も定着せず、全体も10巻構成として計画されていたため、後の叢書の読者に明らかにされたふたつの版と大きな相違を見せている。ただし名前、生没年、職業、それに問題の遺伝類型と遺伝の症例という記述内容の構成は四つのヴァージョンを通して変わることはない。

（19）Augustin Grisolle, *Traité de pathologie interne,* 1862 cité in Alain Contrepois, *Op. cit.,* p.41.

（20）La note（NAF10345, f° 61）d'Émile Zola, in《Docteur Lucas. Hérédité naturelle》, *La Fabrique des Rougon-Macquart. Op. cit.,* pp.88-89 et *Les Rougon-Macquart,* t. V, *Op. cit.,* p.1694.

（21）La note（NAF10345, f° 106）d'Émile Zola *in La Fabrique, Op. cit.,* pp.134-135 et *Les Rougon-Macquart,* t. V, *Op. cit.,* p.1722.

（22）Jean Borie, *Mythologies de l'hérédité au XIX^e^ siècle,* Éditions Galilée, 1981. Jean-Louis Cabanès, *Le corps et la maladie dans les récits réalistes,* 2 vols, Klincksieck, 1991. Isabelle Delamotte, *La médecine, le malade et le médecin dans l'œuvre de Zola,* Atelier national de reproduction des thèses, 2003.

（23）B. A. Morel, *Traiaté des dégénérescences physiques, intellectuelles et morales de l'espéce humaine et des causes qui produisent ces variétés maladives,* J. B. Baillière, 1857 et J. Moreau de Tours, *Op. cit.*

またＢ・Ａ・モレル、モロー・ド・トゥールについてゾラ自身が残した断片的ノートが、最近Ｃ・ベッケールによって公刊された：《Physiologie［sic］morbide（Moreau de Tours）》（NAF10295, f^os^ 132-138）*in La Fabrique des Rougon-Macquart,* vol II, pub. par Colette Becker avec la collab. de Véronique

Lavielle, Honoré Champion, 2005, pp. 298-305.《Traité des dégénérescences de l'espèce humaine par B. A. Morel》(NAF10295, f^{os} 139-141), *Ibid.,* pp.306-309.

(24) B. A. Morel, *Op. cit.* p.125.

(25) ゾラの手になる「変性症」の記述は上記注(23)のモレルの著作に関するノートに見ることができるのだが、「叢書」の作品に関してだと、『ムーレ神父のあやまち』の登場人物のための準備ノートのなかに、ムーレ家の三人の子供について、「それにセルジュ、デジレ、オクターヴの三人とも変性症である」(NAF10294, f° 17 *in La Fabrique des Rougon-Macquart,* vol II, *Ibid.,* p.125)という一文が残されており、また「正真正銘のルーゴン、マッカールというのが、この子供たちなんだ。この一族の最後尾になって、究極の変性症が生じるのだから」(Émile Zola, *La Faute de l'abbé Mouret, in Les Rougon-Macquart,* t. I, *Op. cit.,* p. 1454［邦訳『ムーレ神父のあやまち』p.368］)と、作中でゾラを代弁するパスカル博士が吐く一節を皮切りに、それ以降の作品でこの変性症という当時の遺伝学的専門語が散発的に使用されるにいたる。

(26) Georges Gusdorf, *L'Homme romantique,* Payot, 1984, p.292.

(27) *Nouveau dictionnaire de médecine et de chirurgie pratiques,* 35 vols. sous la direction du Dr Sigismond Jaccoud, J.B. Baillière et Fils, 1864-1883, t. 27 (1879), pp. 514.

(28) Émile Zola, La note (f° 10 de NAF10280) d'Émile Zola, *La Fabrique des Rougon-Macquart,* vol II, *Op. cit.,* p.28.

(29) Émile Zola,《Documents et Plans préparatoires》*in* la note (NAF 10345, f°130) d'Émile Zola, *La Fabrique des Rougon-Macquart. Éditions des dossiers préparatoires, Op. cit.,* pp.158-163 et *Les Rougon-Macquart,* t. V, *Op. cit.,* pp. 1777-1779.

(30) ゴンクール兄弟は、マニー亭での会食仲間で当時フランス医学界の権威の一人であったロバン博士に専門家の意見を請い、それを自分たちの作品で濫用して憚らない一面をのぞかせている。次の一節はロバン博士に『ジェルヴェーゼ夫人』について専門的知識による意見を求めた後で、返されてきた校正刷りを見て漏らした彼らの自信に満ちた述懐である:「私たちは自分たちの書いた肺癆の部分を何度も読み返した。この部分はマニー亭の不毛な雰囲気の中で、漠然としてはいるが霊感に満ちた頭から洩れてきた断片で、興奮でうなりを発しているロバンの言葉と知識の一部だったのだが、もしも私たちが文字にして定着し、生命を与えなかったとしたら、それは存在するにはいたらなかったかもしれない。なぜなら私たちがこの部分に明確さと個性を付与したのであり、彼から発したときには私たちの手になる文体や大胆さで彫琢されていたわけでは決してなかったから。彼が送り返してきた校正刷りを見ると、彼は私たちの原稿を前にだらだらと迷い続け、それから怖じけたように訂正を加えたのだと思われる。」(le 5 février 1869, *Journal* II (1866-1886), Texte intégral établi et annoté par Robert Ricatte, Robert Laffont, 1956, p. 197.)

(31) La note (f° 2 de NAF10295) d'Émile Zola, *La Fabrique des Rougon-Macquart,* vol II, *Op. cit.,* p.108. ちなみにエベルスが腸チフスの病原となる腸チフス菌を発見したのが1880年のことなので、とくに腸チフスの病因論は肺癆のそれと同様『あやまち』の発行当時にはまだまったく不完全であった。『19世紀ラルース大辞典』によれば、この病気はそれまで風土病の一種と考えられていたようである。

(32) 1893年版「家系樹」のエレーヌの項。なおこの夫グランジャンが「肺癆に冒されやすい体質」だったという記述は、本論I章のゾラが肺癆遺伝病説をいつ放棄したかという議論に深く関係してくる。グランジャン自身が登場する『愛の一ページ』(1878)に付けて公表された「家系樹」にはまだこのような記述が見あたらず、『パスカル博士』(1893)とともに公表された「家系樹」で初めてこのように表記されたことを勘案すると、ゾラの肺癆遺伝説の放棄はやはり1893年頃であるという可能性

が一段と高まる。

（33）Émile Zola, *Une page d'amour in Les Rougon-Macquart.* t. II, 1961, p.1063［邦訳p.491］. 以下本作品からの引用は作品名を記して、引用ページを付加するにとどめる。

（34）*Dictionnaire encyclopédique des sciences médicales,* sous la direction de Raige-Delorme et A. Dechambre, Victor Masson, 100 vols, 1864-1889, t. 24, p. 672.

（35）Prosper Lucas, *Traité philosophique et physiologique de L'Hérédité Naturelle dans les états de santé et de maladie du système nerveux,* 2 tomes, J.B. Baillière, 1847 & 1850.

（36）以下のルーゴン＝マッカール家の人々に関する遺伝類型のシェーマ化は、リュカの『遺伝概論』に関するゾラ自身のノート（Les notes（NAF10345, f^{os} 57-115）d'Émile Zola,《Docteur Lucas. Hérédité naturelle》, *in La Fabrique des Rougon-Macquart,* t.1, *Op. cit.,* pp.84-143 et *Les Rougon-Macquart,* vol. V, *op. cit.,* p.1692-1728.）、「ルーゴン＝マッカール家の家系樹」およびそれを整理した金森修「仮想の遺伝学」（『ゾラの可能性』小倉孝誠・宮下志朗編、藤原書店、2005年、pp.105-131）に基づいている。

（37）これらの遺伝型 9 タイプは図上ならびに理論上では当然相互に排他的であるが、ゾラは遺伝形質を身体と精神に分けて記述しているので、たとえばナナのように「接合性混合遺伝」として両親からの直接的遺伝を前提としながらも、同時に「身体的には」母親の最初の愛人であるランチエの「感応遺伝」型が見いだされる場合も生じる。「家系樹」中では、このようなケースはナナの他にクロチルド・ルーゴン（母親型選択遺伝でかつ母方の祖父の回帰遺伝）、シルヴェール・ムーレ（母親型選択遺伝でかつ身体的に自発様遺伝）の 2 例ある。

（38）Émile Zola, *Docteur Pascal, Op. cit.,,* p.1006［邦訳pp. 114-115］

（39）La note（NAF10290, f^{o} 125）*in Les Rougon-Macquart,* t. V, Op. cit., p.1648.

（40）Cf. Delamotte, *Op. cit.,* p. 277.

（41）ゾラと同時代の辞典『19世紀ラルース』や『リトレ大辞典』（Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française,* 7 vols）によれば、「気質（tempérament）」が類義語の「性格（caractère）」や「性質（nature）」に対してもっている際立った特徴というのは、今見たように、生理的物質である体液によって定義されている点にある。したがってこの語は専門的に規定されていた用語である。これに対して「性格」や「性質」の両者はごく一般的に利用される語である。基本的には「性格」が精神面における特徴を指すのに対して、「性質」は身体的特徴を指す場合が多い。そのことは、「性質」が「体質《complexion》」とのあいだで共通性を持ち、両方の語を定義する際互換的に利用されることからも窺うことができる。また「性質」は、「生まれつき」を《de nature》やその形容詞形《naturel》で表現するように、それが持っている不変性を強調される傾向にある。

（42）「テレーズとロランという、ふたりの主人公を思いつくと、わたしは、みずから進んでいくつかの問題を提起して、それを解こうとした。たとえば、この異なるふたつの気質（tempérament）のあいだに生じる奇妙な結びつきを説明しようと努めて、多血質（nature sanguine）が神経質（nature nerveuse）と接触すると、どれほど深刻なトラブルが生じるかを示してみた。小説を丹念に読んでいただければ、各章が、生理学の珍しい実例となっていることがわかるはずなのだ。」（*Thérèse Raquin,* in *Œuvres complètes,* t. 1er, Cercle du livre précieux, 1962, p.520［邦訳『テレーズ・ラカン』、pp.274-275］）

「気質（tempérament）と環境からなる二重の問題を解くと同時に、ある人物から別の人物へ数学的に導かれる一本の糸を見いだし、それをたどることにしたい」（『繁栄』、p.3.［邦訳p.2］）

（43）Michel Serres, *Feux et signaux de brume. Zola,* Grasset et Fasquelle, 1975［『火、そして霧の中の信号――ゾラ』寺田光徳訳、法政大学出版局、1988年］.

（44）Jean-Louis Cabanès, *Op. cit.,* vol.1er, p.282.

（45）Émile Zola, *Thérèse Raquin, Op. cit.,* p.613［邦訳p.170］.

【本論考は平成19～21年度科学研究費補助金の支援による研究、「三大社会病（結核、梅毒、アルコール中毒）と自然主義期の小説」の研究成果の一部である】